



授戒灌頂会に参加して

四天王寺大学学長

岩尾 洋

2年前に新入生と共に授戒会に参加し、今年の5月の連休中の1日を利用して授戒灌頂会じゆかいかんじようえに参加いたしました。四天王寺五智光院・灌頂道場にて執り行われました。参加者は約100名おられ、その中には参加回数の最多の方は32回で、複数回参加されている方が6割おられます。四天王寺の僧侶・職員約100名のお世話を受け、朝9時から4時半まで濃密な時間を過ごす経験をいたしました。授戒灌頂会の目的は、仏道修行に参加し、一人の仏弟子となって悟りの境地に至ることです。午前中は授戒を受け、午後からは灌頂をいただきました。五智光院・灌頂道場は暗く、眼が少し慣れてきても人の輪郭を捉えられることがやっと出来る暗さです。目隠しをして

前の方の服の一部を摘ませて頂きながらグルグル回り歩き、導かれるままに身を任せ投華とうけ・得仏とくぶつをし、目隠しをとると4月に授戒会をして頂いた同じ五智光院とは思えない異空間を体験させていただきました。

お寺を訪れた体験を思い起こせば観光で訪れた以外はありません。ただ、お盆やお彼岸にお寺にお参りした後の墓参りがあります。子供のころは、お墓参りの後に家族そろって神戸の中華料理店で昼食をすることがとても楽しみでした。父が死に、初めて自分の家の宗派のことを知り、法事には実家の仏壇の前に家族が集まり僧侶の読経に合わせて「南無阿弥陀仏」を唱え、父や故人を偲びます。授戒灌頂会に参加して、自分の何かが変わったとは直ぐには言えませんが、時々自分のこと、家族のこと、友人のこと、仕事のことなどをふと思いついて色々考える機会が増えたように思います。ついつい日常のことに追われてゆっくりと気を落ち着けて自分を振り返ることを忘れていたことに気が付きました。まだまだ悟りの境地に至るには程遠い自分の現状に気づかせて頂きました。



“ありがとう”は、 「奇跡」の言葉

教務部副部長
教育学部 教育学科 准教授

杉中 康平

この度、18年間の永きにわたって、本学の「仏教」の時間のお導師としてご指導いただいた桃尾幸順先生が、ご退任されることになりました。今期最後の時間には、桃尾先生に対して、そこに集う全ての者が起立し、心を込めてお礼の言葉を述べさせていただきました。

この18年間、毎週木曜日2限の「仏教」の時間には、ごく自然に読経や瞑想、写経があり、静謐な環境の中で、学生一人一人が、真摯に自分と向き合う時間を持てることができました。それがあまりにも当たり前のように行われてきたために、私たちは、とても大切なことを忘れていたように思います。それは、桃尾先生をはじめとして、多くの方々の支えによってそれが成り立っていたという事実です。

あの日、桃尾先生に対する「ありがとうございました」の言葉に自然と力が入り、心からのお礼を口にすることができたのも、そのことの「ありがたさ」に皆が気付くことができたからではないでしょうか？

この「ありがとう」という言葉の語源は、「有難し」です。「有ることが難しい」、つまり、もともとは、「めったにない」「めずらしい」という意味の言葉だったのです。ありがとうは「感謝」とともに「奇跡」を喜ぶ言葉でもあったのです。

考えてみれば、私たちの毎日は、奇跡の連続です。そもそもこうやってこの世に生を受け、生きていることそのものが奇跡です。そしてそれだけでなく、私たちが、多くの人々の支えによって生かされていることも、また、奇跡なのです。

私は、この「ありがとう」という言葉には、「一瞬一瞬を大切に生きなさい」という仏教の根本精神ともいべき「教え」が宿っているように思えてなりません。日頃、感謝の心を忘れがちな自分に対する戒めの気持ちも込めて、もう一度、この「ありがとう」という言葉の意味を噛みしめたいと思います。

❖ 礼拝を振り返って

仏教文化研究所客員研究員

桃尾 幸順



私事で恐縮ですが私は今春永い間お世話になった四天王寺大学を退職いたしました。そして非常勤講師の立場でこの夏学期礼拝の導師を務めてまいりましたが、それも7月21日で終了し、礼拝から離れることとなりました。その最後の礼拝時には杉中先生から心温まるご紹介をいただき、大変良い雰囲気の中で退任の挨拶をさせていただきました。その時の挨拶と重なる部分もありますが、2回生以上の在學生や保護者の方々もご覧になるものですので、改めて礼拝についての思いを述べさせていただきます。

私は平成9年度から四天王寺大学に奉職させていただいて以来、礼拝に関わってきました。当時は現在の講堂を大講堂と呼んでいて、大学と短期大学を分け、1回生は講話と瞑想、2回生は写経と瞑想を中心に礼拝を行っておりました。学生は仏教Ⅰ～Ⅳの4科目を履修することになり、水曜日の1、2限が短大の1、2回生、木曜日の1、2限が大学の1、2回生に担当されていました。私は1年目の夏学期にはその4つの授業で導師の補助を勤め、冬学期からはそのうちの1コマの導師を勤めるようになりました。

その後、現在の大講堂に場所を移したり、大学と短大が一緒に授業するようになったり、仏教Ⅰ～Ⅳまであったものが、夏学期に講話、冬学期に写経を中心とする、仏教Ⅰ・Ⅱに短縮されたりしてきました。これらの変遷の中で導師を続けさせて頂いたことは、とても光栄なことだと思っています。

仏教に諸行無常という言葉がありますように、すべての物事は変化していきます。大事なことはその変化を受け入れてより良い変化にするように努力することだと思っています。変化に対応することは難しいことではありましたが、教職員の方々と共に、より良い変化となるように工夫してきました。

しかしながら、より大きな変化は、環境よりも私自身の意識の変化でした。私が礼拝に関わるようになったころは、私語も多かったですし、読経や聖歌斉唱の際も学生はほとんど声を出していませんでした。ですから私は静かにさせよう、声を出させようとして

いましたが、なかなかうまくいきませんでした。しかし仏教の主体性を重んじる考え方を授業の中に取り入れようと考えた時、私の意識も変わってきました。学生が主体的に礼拝に参加することが大切だと気付いたのです。つまり静かにさせる、声を出させるではなく、静かにしてもらい、声を出してもらおうと考えようになったのです。そうするとまず自分の気持ちが楽になりました。それまで義務だと考えていた礼拝の厳粛化が目標になったのです。そしてそれまで自分がしなければならないという気持ちが強かったのですが、教職員の皆さんとともに指導することが大事だということにも気付きました。そのことについては聖徳太子の和の精神も関わってきます。

17条憲法の第1条に由来する「和を以て貴しとなす」という言葉は、本学の学園訓の一つになっています。この言葉は礼拝の講話でも取り上げられていますし、ウパーヤの記事にもなっていますが、それと同時に、礼拝の実践においても、重要な理想となっています。すなわち礼拝というのは参加している教職員が話し合いながら心をつ一つにして執り行っていく場であり、そのことを学生の皆さんに示すことが和の精神の習得につながるのです。実際に教職員の皆さんはそれぞれ礼拝を良くしようと頑張っておられます。私は導師として皆さんを引っ張っていくのではなく、皆さんの思いに寄り添っていく方が大事だと考えるようになりました。

この思いは学生に皆さん対しても同じです。学生の皆さんを管理するのではなく、一緒により良い礼拝を作っていこうと考えるようになったのです。指導したり注意したりするのもより良い礼拝を作るために必要だから行うのです。このように考えると随分余裕を持って注意などを行えるようになりました。以前は注意しても従わない学生さんがいた時はイライラしていましたが、今は気長に本人が自主的に改めるのを待てるようになりました。私自身の心の安定は、礼拝全体の落ち着きにもつながっているように思います。

このように振り返ってみると私自身の変化の多くは、仏教や聖徳太子の影響を受けていることがわかります。以前の私は仏教を教える対象と考えていましたが、今ではそれに加えて実践する対象という思いが強くなってきました。自分が実践することで学生の皆さんにも学んでいただけるのではないのでしょうか。

長々と個人的な思いを述べてまいりましたが、私がこれまで礼拝の導師を勤めてこられたのも、先生方や職員の皆さん、そして今まで礼拝に参加してこられた学生の皆さんのおかげです。長い間本当にありがとうございました。

ウパーヤ学生編集員を募集しています

仏教広報誌「ウパーヤ」は第5号から学生編集員を募集して紙面作りに参加してもらっています。

これまで第4面の「聖徳太子のゆかりの地をめぐる」の取材・記事の執筆、およびその取材見学の様子を本学ホームページで紹介してもらうなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしたこともあります。

学科専攻にかかわらず、仏教、寺院、仏像、歴史などに興味

のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声掛けください。ご連絡をお待ちしています。



(矢羽野 隆男)

第9回 卒業生インタビュー

話し手：大亀 早貴（おおがめ さき） クボタ機械設計株式会社

平成25年3月 短期大学部 生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻 卒業生

聞き手：藤谷 厚生（社会学科教授・本欄編集）

仕事について

私は、2013年春に短大生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻を卒業し、卒業後はクボタ機械設計株式会社でAutoCAD(オートキャド)を使って設計図の修正や製作の仕事をしています。学生時代は特にCADの授業を取っていたわけではありませんが、パソコンのワードやエクセルの授業を選択したり、資格を取ったことが、現在の仕事にもかなり役に立っています。また入社してCADを使うまでは、三ヶ月の講習を受けなければなりませんでしたが、在学時のインテリアの授業では、ずっとドラフターを使って製作していたおかげで、有り難いことに全く問題はありませんでした。短大での授業は、高校時代に比べて自主的に授業のスケジュールを組んだりしましたが、現在の仕事でも自分で納期や提出日の計算をしたり、スケジュールを組んだりして仕事を進める中で、短大での経験が大いに役に立っていると思います。また、在学中はキャリアセンターの方には大変お世話になりました。何度もキャリアセンターに通い相談に行くことで、担当者の方と信頼関係ができ、何でも相談できたことが、就職には大きな意味があったと思います。

礼拝の思い出

はじめは、礼拝は未知の世界でした。お経を読むことも、写経も、初めての体験でした。最初は違和感がありましたが、それもすぐに馴染むことができました。私は、元来落ち着きがなかったのですが、半年も経つとじっと立って、心を落ち着けてお経を読めるようになりました。仏教の時間はちゃんとしなければならないという思いが強くなりました。単位も落とせないし、遅刻もできないですし、規律も厳しかったおかげで、15分前行動ができるようになりました。15分前行動というのは、授業の始まる15分前には講堂に到着して準備ができている状態にあるということです。そういった15分前行動の習慣が、今では毎日30分前に出勤するという習慣にもなりました。

また水曜日は、翌日の礼拝を考え、遅刻しないように早く寝るように心がけました。礼拝の良さを一言で言うと、週一回の1000人の合同授業なので、みんなで意思統一をして一つのことをやり遂げないといけないといった感覚で取り組める点です。これができないと社会に出られないという気持ちがありました。そういう意味では、礼拝は社会人になるためにも、とても意義があったように思います。

学園訓について

正直学生時代は、そう学園訓を真剣に考えたことはありませんでした。「礼儀を正しくせよ」というのがありますが、これは自分がきちっとしないといけない、社会人としての恥じらいと心構えが身につく、とて

も大事なことだと思います。また、『四恩に報いよ』の中に、『父母の恩』というのがありますが、就職して働くようになって、かえって両親の有り難さ、今まで育ててくれた感謝の気持ちがひしひしと感じるようになりました。恩返しもしないといけないという気持ちも、素直に持てるようになりました。

『誠実を旨とせよ』というのがあります。就職活動で会社を訪問してくる学生さんの態度が、実は各大学のカラーによって違うのですが、四天王寺大学の学生さんは他の大学に比べてすごく誠実さがあるという印象を何回か感じたことがあります。これなども、知らず知らずのうちに、身についてくるもので、とても良い学園訓だと思います。後輩の学生さんの誠実な態度を見ると、自らも誠実でないといけないと反省したりしています。

学園訓を振り返ると、学生の時はただ漠然と大事なことだと理解していました。いま社会人になって、なぜ礼儀を正しくする必要があるのか、誠実でないといけないのか、また健康を重んじないといけないのか、そういった一つ一つの内容の理由、根拠がより深く理解できる気持ちになります。学生の時よりも、むしろ社会人の今になって学園訓の大切さやその重みを実感しています。

在学生へのアドバイス

就職活動はできるだけ早くからしておくことと、就職してから一年間は、その仕事を辞めずに頑張ってもらいたいということです。私も、最初は不安で仕事で行き詰まることもありましたが、ある時点を乗り越えると、仕事がとても楽しくできるようになりました。そういった仕事の壁を、いつか感じる時もあるとは思いますが、ぜひともそういう壁を乗り越えて、頑張ってください。

また、これだ!と思うことを学生時代に何かやってみてください。私は学生の時から、自転車ですべてどこでも行くことをしていました。堺から神戸や、琵琶湖へも、自転車で行きました。自分への挑戦になりますが、何かこれはやり遂げたということがあれば、そのことが自分の自信につながりますし、精神力も大いに培うことができます。そういった意味では、学生時代の体験や苦勞が自分自身を大きく成長させるものだと思います。二年間という短い期間ではありましたが、社会人となった今では短大での学びや経験が、大いに活かされていると喜んでます。



平成28年度 夏学期「仏教I」 講話題目

- | | | | |
|-------|--|-------------------|---|
| 4月7日 | 桃尾 幸順先生「礼拝説明」 | 伊達 由実先生「大学生生活の心得」 | |
| | 杉中 康平先生「受講どころえー授業規律に関して」 | 6月2日 | 成田 由岐子先生「学生生活について」 |
| 4月14日 | 学長 岩尾洋先生「建学の精神—「どころえ手帳」に寄せて」 | | 水無月祭・スポーツ大会について(井戸 優佳さん、杉浦 ちひろさん、奥村 哲平さん) |
| | 桃尾 幸順先生「授戒オリエンテーション」 | 6月9日 | 金岡 敬子先生「自分の人生をどう営んでいくのか」 |
| | 原 祐子先生「聖歌練習(授戒会の練習)」 | 6月16日 | 原 祐子先生「仏教聖歌—心に響く歌を—」 |
| | 学生運営委員募集(山崎 耕作さん) | 6月23日 | 原 健一郎先生「開経偈—出会い(縁)の不思議—」 |
| 4月21日 | 桃尾 幸順先生「瞑想—心を整える楽しみ—」 | 6月30日 | 南谷 美保先生「仏像を知ろう—仏様に会いに行くとは?—」 |
| | 矢羽野 隆男先生「『ウバーヤ』第8号について」 | 7月7日 | 坂本 光徳先生「般若心経—空の教えから学ぶ—」 |
| 4月28日 | 兼子 恵順先生「四弘誓願—利他の誓い—」 | 7月14日 | 上續 宏道先生「回向文—私のためにはあなたのため、あなたのためは私のため」 |
| 5月12日 | 拜田 清先生&学生(中口 実花さん、田村 茉衣さん、清水 健太さん、岡本 和希さん)「海外留学・語学研修について—アメリカ、カンボジアそして韓国—」 | 7月21日 | 伊達 由実先生「『薬物』について」 |
| 5月19日 | 矢羽野 隆男先生「学園訓について—和について—」 | | 杉中 康平先生「夏学期を終えるに当たって」 |
| 5月26日 | 藤谷 厚生先生「懺悔文—日々の行いを正し、省みる心—」 | | 桃尾 幸順先生「退任のあいさつ」 |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

— 鶴林寺（兵庫県加古川市） —

鶴林寺は、兵庫県・加古川市の緑が生い茂る中に建っており、200点以上の国宝や重要文化財が残る播磨の国有数のスポットです。

鶴林寺は、589年に聖徳太子の命によって釈迦三尊像と四天王寺像を安置し、「刀田山四天王寺聖霊院」と名付けたのが始まりだと伝えられています。太子は崇仏派と排仏派の争いによって加古川に身を隠していた高句麗の僧・恵便を訪ねて教えを受け、そこに建てられたのがこのお寺です。その後、1112年に鳥羽天皇の勅願寺（国家の安寧、繁栄を願うための寺）として「鶴林寺」となりました。これは、釈迦牟尼の涅槃（死去）のときに、沙羅双樹の葉が真っ白になり、まるで鶴の羽のようだったという故事にちなんでいます。

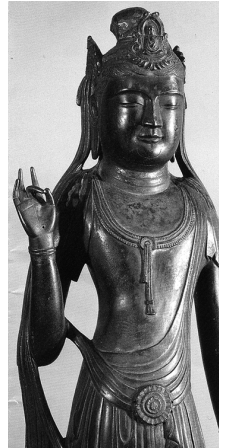
境内に入っただけで目に留まるのは、室町時代（1397年）に建てられた国宝指定の本堂です。本尊は薬師如来。日本独自の和様と中国から伝わった唐様、天竺様がうまく混ざり合った建築物は、他と調和するという、仏教における「和」の心得が形として表れています。



本堂の隣は、これもまた国宝指定の太子堂です。こちらは平安時代末期（1112年）に建てられた、兵庫県で最も古い建造物。本尊は釈迦如来。

萱や瓦ではなく、椴皮（ヒノキの皮）で葺いた屋根はおもわず見とれるほど美しく、手間暇がかかっていることが一目でわかります。また、室内には板壁に絵が描かれていたようですが、現在はスズで覆われていて見ることはできません。しかし、1976年に当時の住職が赤外線写真での撮影に成功し、「仏涅槃図」（釈迦の死と、それを悲しむ弟子たちの様子を描いた図）は、板絵では日本最古であることがわかりました。

鶴林寺には宝物館があり、こちらには数々の文化財が展示されています。分かりやすい図解や、タッチパネルを利用したもので、楽しんで宝物を見ることが出来る工夫が凝らされています。中でも有名なものが、「あいたた観音」の名で親しまれている銅造聖観音立像。その昔、泥棒がこの像を盗み、像の腰のあたりを槌で打つと「あいたた…」という声が出た、という話からこの名前がついています。その後、この泥棒はとて驚いて像を返し、もう悪さをしないと心を改めたのだとか。そんなあいたた観音さまはすわりとしてくびれもある、プロポーションの良い立ち姿ですが、お顔は親しみやすい微笑みを浮かべています。海外の美術展には、日本の仏像の代表として4回も出展されています。



鶴林寺は、仏教の歴史と文化の流れを感じることで出来るお寺です。ぜひ、広い境内で古くも美しい建物のあいだに吹く穏やかな風を感じてみてください。

（学生編集員：三宅 亜季）

仏教のことば

— 涅槃 —

涅槃とは古代インドのサンスクリット語のニルヴァーナ（Nirvāṇa）を音訳したもので、貪欲・瞋恚・愚痴などの一切の煩惱の炎（ハタラク）を「吹き消すこと」、または一切の煩惱の炎が「吹き消されている状態」をいいます。

お釈迦様は45年間の仏教伝道の生涯をすごし、80歳の時に故郷をめざして旅に出た途中で、クシナーラ（今のクシナガラ）の地で亡くなられました。

した。お釈迦様が亡くなられたことを仏教では「涅槃に入られた」といいます。一切の煩惱の炎が吹き消され、最高の悟りの境地に入られたことを意味しているからです。涅槃は煩惱の束縛から離れた自由の境地であり、あらゆる苦しみから解放されているので、この境地を「解脱」ともいいます。

この境地に入られた2月15日に行われる法要に涅槃会があります。涅槃会ではお釈迦様が沙羅双樹という木の下で、北に頭を向け右脇を下にした姿で横になっている周りに、多くの弟子達や鳥獣、虫、花や木などあらゆる生きとし生けるものの嘆き悲しむ姿を描いた涅槃図を掲げて法要が行われます。

お釈迦様は自らの涅槃の前に弟子達に「自灯明法灯明」（自らと真理を灯火とし、抛り所にしなさい）と説き、すべてのものはうつろいゆく、忘ることなく勤め励むようにと教えられました。「最後の説法」とされるこの教えは、仏教の実践の重要な指針とされています。（上續 宏道）

編集後記



今号の巻頭エッセイは、4月に新学長に就任された岩尾洋先生、そして礼拝担当の教務副部長に就かれた杉中康平先生がご執筆くださいました。いっぽう第2面は8月末で導師を退任された桃尾幸順先生が18年間の礼拝への思いを綴ってくださいました。名残り惜しくはありますが、仏教文化研究所の客員研究員として今後もお力添え賜ります。第3面の卒業生インタビューは短大生専攻の大亀さんが、学生時代を振り返りアドバイスをくださいました。通読して、「気づく」ことの大切さを思いました。「大切なこと」は、当たり前前だと思っている身近なことの中にあり、ふとしたきっかけに見えてくるようです。（T.Y）

研究所員紹介

所長 岩尾 洋（学長・教授）
主任研究員 矢野野 隆男（教授）
研究員 上續 宏道（教授）
兼子 恵順（教授）
藤谷 厚生（教授）
源 健一郎（教授）
杉中 康平（准教授）
奥羽 充規（講師）
坂本 光徳（講師）
南谷 恵敬（客員教授）
桃尾 幸順（客員研究員）

UPAYA（ウパーヤ）9号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

平成28年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前三丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611

URL: <http://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPAYA（ウパーヤ）」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail bukken@shitennoji.ac.jp
（件名は「ウパーヤ」としてください）

